

因果は巡る風車

塚本三郎

◎選挙はその時代の風向きによって、政党の勝敗が変化する、それが民主政治の宿命か。日本では、昨年の参議院選挙で民主党が圧勝した。まるで、その前の衆議院選挙で民主党が圧勝したのが嘘だったと思える程に勝敗が逆転した。

お隣の韓国も同様に、政権は金大中、盧武鉉政権から、野党ハンナラ党の李明博に変わった。いや南の台湾も同様に、野党国民党の馬英九氏が圧勝した。そして今年秋の米国大統領選挙でさえ、ブッシュパパの八年、そして現ブッシュの八年、合計十六年、米国民党政権は、漸く野党の民主党に移るであろうとの風向きとなった。

政権の交替が、その時代の風向きに振り回されると言えなくもない。

小沢は怨念の政治家だ。ゼニ丸こと金丸信を後ろ盾に、自民党幹事長として権勢を欲しのままにした。総裁の座を目前にしながら、金丸の逮捕・失脚で頓挫、あげく離党せざるを得なくなる。付き従った羽田孜、渡部恒三、石井一、鳩山由紀夫……民主党の現幹部は、いずれも経世会で、本来なら自民党内で一派をなすグループだ。それが民主党を名乗って、福田自民党と対峙する。その抗争は、本来なら自民党内の権力闘争のはずだった。ところがそれを国会の場に持ち出している。日切れ法案を参院で塩漬けにして、ひたすら嫌がらせをする。これをしも政権抗争といえるか。

九段靖之介 W i L L 五月号参照

国民を人質の泥仕合。三十年前、大蔵省出身の福田赳夫を中心とする官僚群に対抗して、今太閤と評された、田中、金丸を頭とする経世会の面々の対立は、自民党内の抗争であったから、野党の我々にとっては、当時高みの見物と見過ごすことが出来た。

併し今度の抗争は、与党内ではなく国会内での抗争である。与党と野党の政権争奪であり、国民を人質にとつての、審議拒否の抗争と化している。その上、衆議院と参議院の院の権威をかけてのニラミアイでもある。そこには憲法及び過去の「法制の欠陥」を利用した野党の攻めであり、過去の慣例を押し通さんとする与党の「官僚支配の惰性」とのぶつかり合いでもあるから、三十年前の抗争よりも一桁も大きな対立であり、国家の品位と信用をかなぐり捨てての抗争と化している。

◎ことの始まりは、小沢一郎が経世会の相当数を引き連れて自民党を脱党し、うまく風に乗った細川護熙の、日本新党と合流した細川政権からである。細川護熙はマスコミの風車に乗って、政権を担当し、その上再びマスコミの風車に乗せられて、小選挙区制を実現した。

欧米の民主主義政治の大部分が、ほど良く政権交替をする二大政党である。日本もほどよく与野党が政権交替をする為には、二大政党であることが望ましい。それには各国が実施している小選挙区制が土台であったからだ。

ゆえに小選挙区制を実現することが基本だと、マスコミも、政党人も勘違いした。欧米各国は、二大政党であるからこそ小選挙区制がふさわしい。それを逆に取り違えて、小選挙区にすれば、二大政党に収斂されると勘違いして、強引に小選挙区制度を強行したのが細川内閣であった。その後ろ盾が小沢一郎氏とみられる。自民党も、マスコミの風に吹かれて、やむなく小選挙区制に賛成せざるを得なかった。

選挙互助会の党

小選挙区制となれば政党は一区一人の当選だから、一党から複数の公認は出来ない。

立候補の意志を持っていても公認を得られない候補者は、止むなく離党し、別の党を名乗って出る以外にない。かくして今日の各党の内情は、全く別々の思想と政策を持つ多党化の様相となってしまった。しかし、選挙の時の為に、一つにまとまる必要があるため、外面は一つの政党となっている。ゆえに各党共に「選挙互助会」とアダ名される。与党も野党も、政党としての体を為していない、党内はバラバラの多党化現象が実状である。

小選挙区制となつて、従来の中選挙区を一区一人に細分化した。群馬県三区出身の中曽根、小淵、福田の三人のうち、福田康夫、小淵恵三の二人を小選挙区に位置し、中曽根康弘に、大勲位と呼ぶ最高位の叙勲を与え、ゆえに小選挙区ではなく、北関東比例第一位で当選を確約し、永久当選に祭り上げたのが、竹下元首相の苦肉の策であった。

小泉政権になって間もなく、自民党では、衆議院の公認候補者の定年制を実施することになり、七十三歳と決めた。ことの成り行きから、生涯一位の榮譽を担って居られた中曽根先輩も、定年の例外とは為し得ず、小泉首相は、心ならずも大先輩に次期衆議院選挙への辞退を言い渡さざるを得なかった。そのゆえか内閣改造の際、ご子息中曽根弘文を、文部大臣に任命して注目を集めた。中曽根大勲位への申し訳と解釈した人が多い。

郵政民営化法案は衆議院を通過した。しかし危惧された参議院は、最後の土壇場で、中曽根弘文議員が、数名と語らつて反対に回つた結果、参議院で否決となつた。

中曽根大勲位の怨念ともみられる。小泉首相は、国民の意思を問うと言つて、郵政民営化の法案に賛成したのに、衆議院の解散に打つて出た。まるで八つ当たりのようだ。

衆議院選挙に際して、郵政民営化に反対した自民党議員は、党議違反として党公認を与えなかった。のみならず公認を外した旧自民党候補者に対して、知名度の高い人達と、美人の女性を党公認候補として対立せしめた。マスコミはこれを「刺客」と評した。

永年同志として苦楽を共にした仲間に対して、公認を外すことは政党として止むを得ない。だが刺客まで差し向ける仕打ちに対して、マスコミは嘲笑し、国民から響きをかた。結果は、小泉政権の圧勝に終わった。郵政事業が地域に果して来た効果と集票力は、過疎

地域こそ大きい。それに加担した議員の多くが落選の悲運に泣いた。

◎間もなくおとずれた参議院選挙に際し、民主党代表小沢一郎は、田中角栄仕込みの選挙戦術を心得ている。郵政民営化による善、悪は別にして、当面、直接に被害を受けたのは過疎地域である。それは即小泉首相に対する怨念が重くのしかかっている地域である。

参議院選挙に際して小沢一郎は、過疎の一県一人区となつている地域で、集票に全力を注いだ。その結果、一人区のうち四分の三の県で勝利した。選挙史上特筆すべき勝利である。その結果、衆議院は自民・公明の連立与党で三分の二を越す勢力であり、参議院は民主党を中心とする野党が、過半数を十七議席上回った。衆議院の圧勝から僅か一年後に、民主党中心の野党が、参議院逆転の大勝利となり、ここからネジレ国会となつてしまった。

参議院選挙で、なぜ自民党は大敗したのか、そして民主党はなぜ勝利を得たのか。

勝者も、敗者も、その原因を究明する必要がある。理念か政策か或いは客観情勢か。

勝つたから俺の言うことを聞け、と言わぬばかりの居丈高な野党と、負けたから仕方がない、という低姿勢の、双方の見苦しい姿と顔が、連日テレビに大寫しである。双方の責任者の勝敗の原因を省みる姿勢は見受けられない。

◎参議院選挙は、日本国民が聡明な判断を下したと思う。自民党・小泉前総理の果した衆

議院選挙は、余りにもヤリスギと国民はみてとった。自民党の一部の郵政反対議員は、決して小泉が憎いのではない。過疎地域の生活の拠り所は郵便局だ。その上、郵貯と呼ぶ世界の巨大銀行が、やがて民間銀行となり、米国の要望通り開放されたら、国民の零細な貯金が危なくなる。そんな深慮から、小泉の執念にも似た郵政民営化にストップをかけた。それに対抗して小泉首相は、衆議院の解散と反対者への刺客は、今迄の自民党にあらざる所業であった。この際、自民党そのものに「お灸をすえ」反省を求めべきだ。これが参議院選挙の民意であると私は判断する。

民主党の勝利に、小沢一郎がいみじくも連立政権の際言明した如く、未だ政権を担うには未熟な点が多い。せめて大連立によって、政権とは如何なるものかを、実際の政務を学ぶ天与の機会と受け止め、修練を重ねる必要がある。その見通しと信念は見事であった。惜しむらくは、その言を旬日を経ずして、自ら否定してしまったことである。

民主政治を経ること既に六十余年を経験した日本国民は、衆議院と参議院の比重を知らないはずはない。小泉のやりすぎを、今のうちに修正させておきなさい。そんな期待こそ参議院選挙に於ける、民主党へ投票した民意と受け取るべきではないか。

それを、天下の権を渡せ、そのため直ちに衆議院を解散せよ。風向きの変わらないうちに。そんな民主党幹部の焦りの顔色がみえる。

解散の手段として、国民生活に必要な法案を人質にとつて、与党を追い詰めている。目的の為には手段を選ばない。国民は、そんな荒っぽい手段を許すだろうか。

参議院は衆議院の「ゆきすぎ」及び「足りない点の補完」の為の任務であったはずだ。しかし、今日の民主党は、参議院が直近に示された、国民の民意だからとうぬぼれて、衆議院で採決された与党の法案の大半を阻止して、衆議院の無力さを国民に示してみせる。法の不備を利用し、国会同意の人事案件まで支配している。日銀総裁の与党案を三度拒否した。野党は、国民を人質にとつての与党への逆襲ではないか。

福田首相の対応もまた、余りにも拙劣であり、政権に対する執念に見えて見苦しい。

見るに見兼ねた河野衆議院長と、江田参議院議長の間、功を奏しなかった。

両院議長の仲裁案を、与野党の代表が受諾しておきながら、即日、議長案を嘲笑するが如く、自民、民主の代表者が、百八十度異なった意味に受けとる、受諾声明を発表した。これは両議長をグロウする態度である。

ガソリン税の特別加算税の維持が打ち切られて、消費者に迎合した民主党は、大いなる支持層を得たとほくそ笑んでいるだろう。参議院選の勝利が、幸運をもたらした。

だが参議院選挙をして、民主党の勝利をもたらした、郵政民営化反対の、自称被害者地域、即過疎地は、ガソリン税の削減によって、道路財源の相当数を打ち切られる。

それで泣くことになったのは、さきに郵政民営化で、腹立たしい思いを晴らす為に、小沢民主党支援に協力した過疎の県ではないか。その県知事や市長達が、今度は逆に、道路財源を守れと、民主党に対抗して自民に陳情している、これはマンガである。

何から何まで、あなた任せの風車の政局は、際限なく因果の裏表が繰り返されている。

衆参のネジレ現象は、与、野党が国家と国民のために、真摯に話し合う天与の機会である。それをしも逆用する野党の無責任と、自らの信念を持たず、無能を暴露しつつある福田首相に、国民は、国家の前途を悲観し悲鳴をあげている。日本丸の迷走をいつまで続けるつもりなのか。

平成二十年四月上旬